



**爆竹調馬之図絵** 越葵文庫 当館保管  
この絵巻には、福井城の西の外堀に面する桜門より出馬して、本町通りを終着点の九十九橋北詰に向かう乗馬の武士たちを、町人や百姓が鳴り物・旗などで激しく威嚇し、進路を妨害する様子が活写されています。馬威しは大変人気があったようで、本町通りに面した店の中や九十九橋北詰は見物人であふれ返っています。街路には、左義長飾りや子供が遊ぶ太鼓小屋が置かれ、店外には丸太や垂木、竹などで結われた頑丈な馬除けの柵が設けられていました。上部の写真は絵巻のなかの本町通りと九十九橋北詰の部分を掲載しています。

企画展

# 正月の奇祭「馬威し」

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 1階 松平家史料展示室
- 会期 令和5年12月7日(木) ~ 令和6年1月28日(日)

江戸時代の福井城下で盛大に催されていた正月行事に奇祭「馬威し」がありました。今回の展示では、馬威しに関する古文書や記録、屏風や絵巻などの絵画作品を通して、馬威しの由来や目的、その実態などについて紹介します。

## 1 馬威しの由来と目的

馬威しは「左義長馬威し」「左義長走馬」「左義長責馬」とも呼ばれたように、正月の左義長神事に関連して行われるようになりました。その起源は福井藩の武士が馬術訓練を目的に、左義長の火祭で燃え盛る「左義長飾り」の周囲を馬で乗りまわしたことに始まるとされています。後に庶民が参加して馬を威す行為が加わったことで、福井藩独特の尚武的な競技として発展しました。また、この行事は武士と庶民が競い合うことで、身分的な融和が図られたとされます。

天保14年(1843)に福井藩主松平慶永(春嶽)は初入国を前にして、水戸藩主徳川斉昭へ藩主の心得(9か条)を尋ねましたが、その回答書のなかに馬威しのことが出てきます。斉昭は、平和な時代に乱を忘れずという古人の戒めがあるが、太平の世では容易に兵を動かすことは憚られる。御家(福井藩・松平家)には旧来から馬威しがあり、軍事訓練の意味を加えて永続させれば、非常の備えになると述べています。慶永は入国した翌年の正月に、福井城桜門内の武家屋敷(佐野家)で初めて馬威しを観覧しました。

藩政時代に人気のあった馬威しは、明治4年(1871)の廃藩置県以降も催されていましたが、明治の半ばには廃れてしまいました。

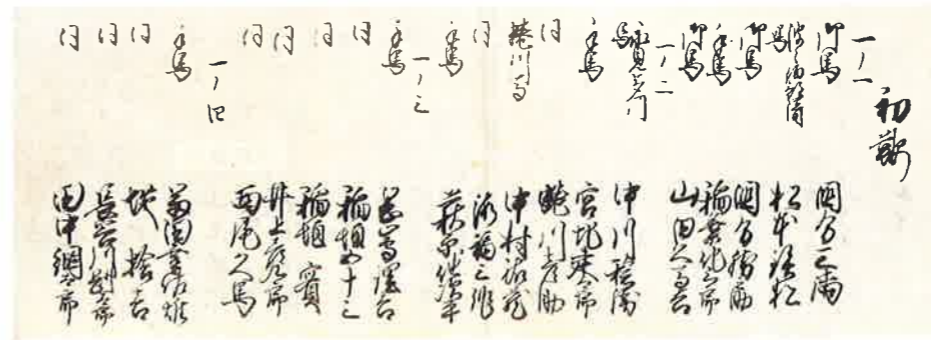
## 2 馬威しの日程と場所、参加者と攻防

馬威しは旧暦の1月14日に催されるものを「本威し」「本馬」と呼び、それに先立って催されるものを「下威し」と呼びました。最も盛大であった「本威し」の場所ですが、最初に福井城桜門内で行われ、次に桜門から町方に出て片町を横切り、本町通りから終着点の九十九橋北詰に到る街路で行われました。

「本威し」は「初鞍」と「二鞍」の2回、午前と午後にかけて開催されています。明和2年(1765)の初鞍の場合は8組に分けられ、1組は7疋(匹)から9疋で構成されました。馬の乗手は福井藩士の当主や子弟、藩主の小姓や近習、上級家臣の家来(陪臣)などです。特に文政11年(1828)の参加馬は多く、初鞍が104疋で、二鞍は90疋に上りました。

馬の進路を妨害する人々を「せぎ手」や「威し人」と呼び、城下の町人や領内の村人(農民)が数多く参加しました。妨害方法は、大声を出したり、銅鑼のような「鳴り物」を鳴らしたり、馬前で旗や吹き流しなどを振り回したりして、馬を威嚇したり、驚かししたりするものです。馬の馬前に立つことは許されていましたが、直接馬に取りつくことは固く禁じられていました。

「馬威し図屏風」や「爆竹調馬之図会」などの絵画作品には、乗手の武士たちが馬を上手に操って完走しようと奮闘し、妨害する庶民との間で激しく攻防する場面や、それを見物する夥しい数の庶民の様子が活き活きと描かれています。



明治2年(1869)に催された馬威しの参加者を書き付けた記録です。初鞍の参加馬は45疋で、二鞍は46疋でした。

左義長馬おとし名前 福井市春嶽公記念文庫

次回の展示

松平家史料展示室 企画展  
「福井城下の刀鍛冶～越前新刀オールスター～」

2月3日(土)～3月12日(火)

展示解説シート No.164  
令和5年12月7日発行

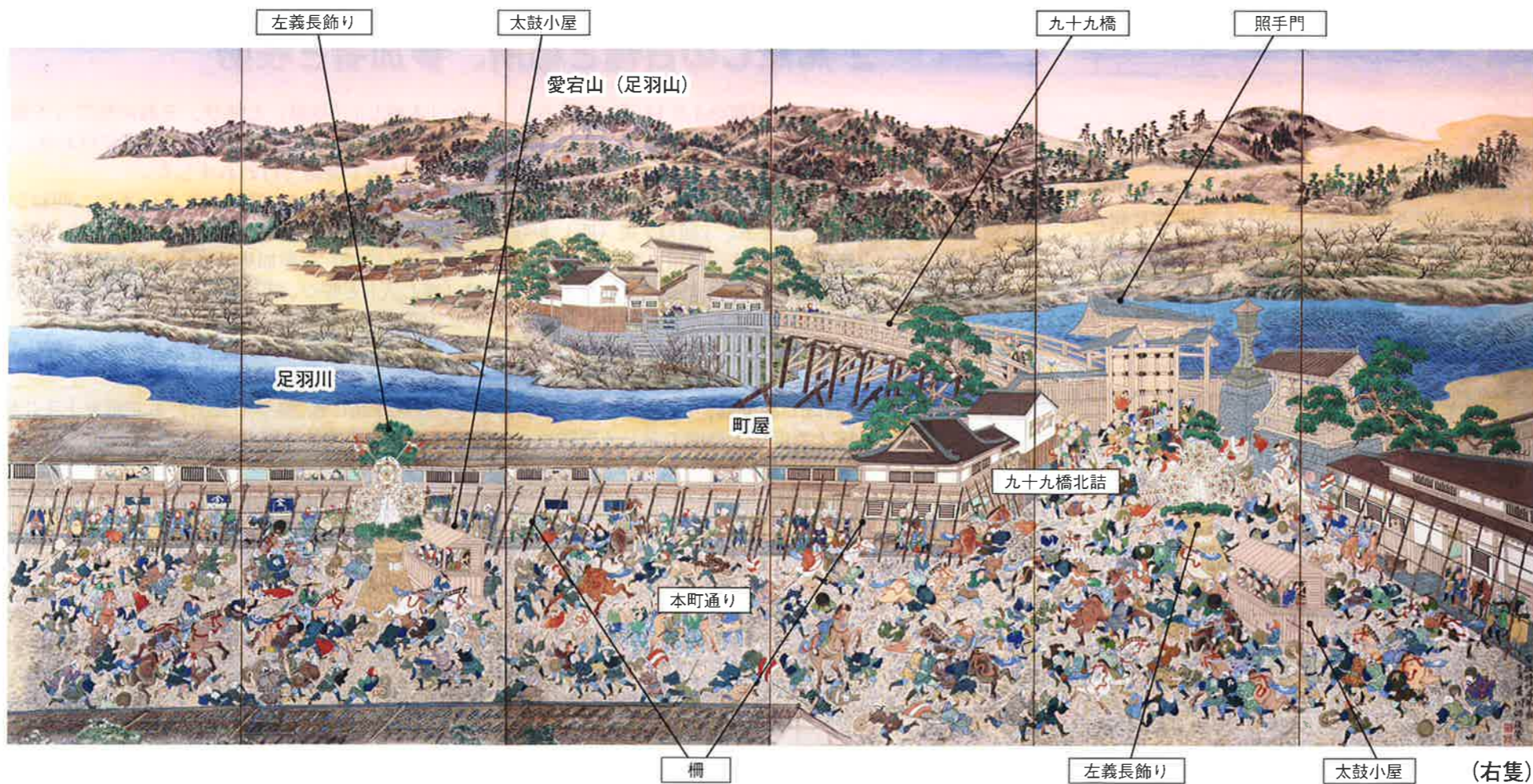
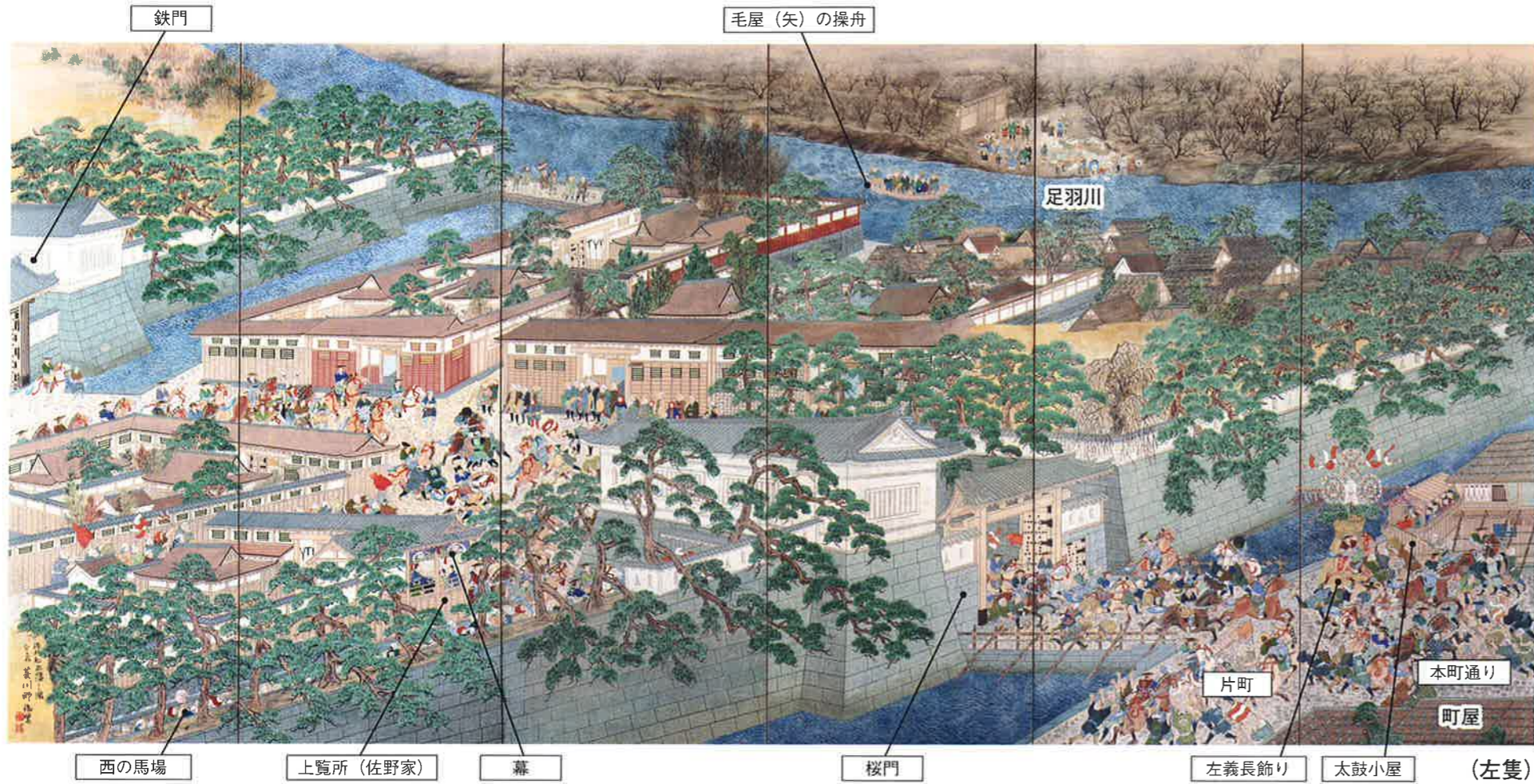
福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1  
電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489  
担当 印牧 信明

印刷 株式会社印刷



# 馬威し図屏風



武家屋敷(佐野家)で観覧する藩主

馬威し図屏風(六曲一双) 福井市立郷土歴史博物館蔵  
 この屏風は郷土の画家菱川師福が、昭和12年(1937)に93歳で描いた作品で、福井市内の富商片山外吉氏の依頼を受けて制作されました。左隻には、馬威しが最初に行われた福井城桜門内での様子や、桜門から城外に出て、町方の片町や本町通りで行われた様子が描かれています。右隻は、本町通りから終着点の九十九橋北詰の街路で行われた馬威しの様子を描いています。また、左隻の左下部分には、武家屋敷(佐野家)に設けられた上覧所が描かれており、藩主が観覧しています。右隻の右端下部に「安政時代之図」と書かれていることから、藩主は幕末に活躍した松平慶永(春嶽)であると思われます。

